

台湾 8 日間縦走記（平成 30 年度人文科学研究所総合研究旅行旅程）

堀江 洋文

成田発のエバー航空 107 便は、12 月 23 日午後 15 時 40 分、ほぼ予定通りに高雄空港に着陸した。入国審査、通関を終え、中華民國観光導遊協会に所属するガイドの陳さん（Daniel Chen）の出迎えを受ける。外に出ると、シンガポールやバンコクに降り立ったような暑さと湿気ほどでないが、やや不快感を覚える暑さである。数日後訪れる嘉義市の南西 3 キロ程のところに北回帰線標塔があるが、それより南に位置する高雄が熱帯に位置する（標塔より北は亜熱帯）ことを考えれば、この程度の暑さには納得がいった。空港から高雄市内に入り、日本統治時代には高雄運河と呼ばれた愛河（アイホー）にかかる高雄大橋を渡り、駁二藝術特区大倉倉庫に立ち寄る。同じ藝術特区の大勇倉庫や蓬萊倉庫とともに、洒落たカフェや雑貨店、ライブハウス等が新しく内装が施された倉庫に入るが、外観はかつて台湾の主要産業であった製糖業の糖業倉庫（後述する台湾糖業公司）として使用されていた頃の建物を上手く利用している。ホテルにチェックイン後、当初予定していた六合國際観光夜市を、本学国際交流センターの BCL コースに留学していた高雄市の中山大学学生の林さんの勧めもあり、瑞豐夜市に変更し夕食に繰り出す。前者に比べローカル色が強い夜市と聞いていたが、高雄市民と観光客の若者達でごった返していた。台湾全体に言えることであるが、これでも現在の蔡英文民進党政権以前の馬英九総統（国民党）時代に中国人観光客が大挙して押し寄せた頃と比べると、観光客数はかなり少ないようである。若者に人気の瑞豐夜市と比べると六合國際観光夜市の落ち込みは大きいとの話であった。

翌 24 日は、午前中にかつて台湾製糖業の中心であった製糖工場跡地（台湾糖業股份有限公司、旧台湾製糖公司・橋頭糖廠、現在は台湾糖業博物館）を調査。この糖廠（糖廠とは製糖工場）は、1900 年に三井財閥を中心に設立された台湾製糖公司の主力工場であった。まず当時日本人廠長、副廠長宅であった家屋や社宅事務所を見学。社宅事務所の建築様式は、東南アジアのオランダ・コロニアル・スタイルと言われる様式の建造物で、土台部分には風通しのための通風孔があり、屋上の壁にはいくつかの狭間のような穴があった。この狭間は、日本統治時代に「抗日人士」の襲撃を想定した防御用で、この穴から銃を撃つことができる。次にかつての社員倶楽部であった製糖博物館を訪れたが、台湾の砂糖キビ生産の改良と増産に尽力し台湾糖業発展の基礎を築いて「台湾砂糖の父」と呼ばれた新渡戸稲造の胸像が置かれていた。新渡戸は、台湾総督府民政長官の後藤新平の熱心な招聘で総督府殖産局長に就任している。台湾総督府の枠組みの中で台湾統治に携わった後藤や新渡戸の不安は、かなり大きかったはずである。

西欧列強の場合は、長期にわたって宣教師が現地に入り、布教活動の傍らその土地の言語や風俗習慣を調査し、次いで商工業の進出を経て、現地に関する十分な知識や情報を得た後で植民地支配に従事していった。しかし、日清戦争の戦後処理としての日本の台湾領有には、西欧列強のような段階的植民政策を立案する余裕は与えられなかった。後藤が言うように、「文明的植民政策の準備行為」は殆どないに等しい状況下での統治政策の遂行であった¹⁾。博物館を出て、かつて砂糖キビの運搬に使われた五分車（狭軌線路故にこの名がある）のディーゼル機関車や線路、農具展示所では砂糖キビのトラック等からの上げ下ろしに使われた卸蔗機を見て、当時の糖廠の繁栄に思いを馳せる。展示ではオランダ東インド会社、鄭成功や清朝のそれぞれの時代において、糖業が既に台湾の主要産業に育ちつつあった事実がパネルで説明されていた。日本統治期の台湾製糖業がすべて順調でなかったことは、展示の中にあった 1925 年の二林蔗農事件で明らかである。この事件は、台湾中西部の彰化二林地区で待遇改善（甘蔗価格引き上げ要求）を求めて立ち上がった甘蔗栽培農民による、台湾初の農民運動として記録される。SINCE 1901 と書かれた旧製糖工場（現在はほぼ廃墟）の煙突を背景に、五分車の機関車と線路を前方に入れて写真撮影。続いて、14 時に予定されている本学の提携校中山大学訪問を前に、少しの時間ではあったが製糖工場同様高雄市の北部にある左営蓮池潭・龍虎塔を訪問。淡水湖に沿って進み龍虎塔に約束事に従って龍の口から入り、虎の口から出る。龍虎塔は、道を挟んで隣に建つ道教廟・慈濟宮が建てた宗教施設である。時間の関係もあったが、慈濟宮で参拝せず龍虎塔だけを訪れたのは、不手際との誹りを免れない。

昼食後、西子灣の海岸線に広いキャンパスを持つ中山大学を訪問。出発前から連絡を入れていた日本研究センターを見学し、その後社会科学棟の会議室で同センター長の郭育仁教授と懇談の時を持った。センターでは活動の様子を記した各種パンフレットを受け取り、スタッフの方々と記念撮影。壁に李登輝総統の字で「日本研究中心」の表札が額に入って飾られている。郭教授は、南カリフォルニア大学で博士号を取得後、現在中山大学で国際関係論を教えておら

¹⁾ 野村明宏「植民地における近代的統治に関する社会学：後藤新平の台湾統治をめぐって」『京都社会学年報』7（1999 年）1-20 頁。第 4 代台湾総督児玉源太郎により民政局長に任命された後藤は、台湾原住民や漢人の文化や慣習を重んじる施策を行うべきとの理念を持ち、また後藤とほぼ同時期に宜蘭庁長に就任していた西郷隆盛の子菊次郎も、力による支配の限界を痛感し、台湾赴任時の建白書に「台湾治政の肝要点は、まず明清の収攬にあり、その為には常に住民の立場から治政を考えることは忘れるべからざる最重要事なり」と記している。星原大輔「台湾統治の課題と後藤新平」『台湾と日本人』松井嘉和編著、錦正社、94-9 頁。「外地」として位置づけられた台湾には、外地法制度と外地統治機構という統治方法が導入された。外地法制度によって、台湾には憲法を施行しないと、憲法が定めた立法手続きに従わずに行政官たる総督が法律に代わる律令と呼ばれる命令を発するとされ、総督に委任立法権が付与された。日本の外地統治の基本原則は、行政権が全てを統括し統治政策を遂行することであるが、実際には、台湾総督に絶大な権限が付与されていたわけではなく、台湾総督府はあくまで行政機関の出身であって、本国政府が全てを管轄し統括することになっていた。檜山幸夫「台湾総督の律令制定権と外地統治論」『台湾総督府の統治政策』中京大学社会科学研究所、1-7 頁。確かに台湾総督府の立法機能的地位にあった台湾総督府評議会は、総督への建議を行うことができたが、それもあくまで本国政府の管轄の枠内での話である。

れる。ご専門は、日本の安全保障問題で、今回の我々の訪問の1ヶ月後には、再度来日されて防衛省で研究をされるとのことであった。中山大学に到着した時に正門前で出迎えてくれた国際関係論専攻修士1年生の張さんも、日本の安全保障の専門で、郭先生の下で学んでいるとのことであった。懇談会では郭先生が自己紹介と中山大学の現状を説明され、人文研所員の質問に答えられた。幾つかの論点があった中で、台湾の出生率の衝撃的低さには一同驚かされた。国家安全保障にも直接影響する出生率問題は、見方を変えれば台湾が急速に移民受け入れ体制を整えつつあることの証左であり、その点では、先日出入国管理法改正をめぐって大揺れの日本などは、まだ問題の序の口の議論をしているに過ぎない気がした。台湾には有期労働ビザを取得して東南アジア諸国からやってきた労働者が70万人いる。既に彼等は台湾総人口の3%を占めており、台湾経済を支えている。台湾は日本の先を行く移民社会となりつつある。さらに所員からは、中山大学の名前の由来となっている孫文の三民主義が、台湾や同大学でどのように教えられているのかについて質問がなされ、それに対し、現在中山大学を含め台湾全体で三民主義についてはほとんど顧みられることがない現実が郭教授によって紹介された。また、中山大学と中国本土との関係については、中国人学生の入学希望が多数ある中、例えば同大学が得意とする海洋学等の分野では、安全保障の観点から中国人学生の入学が制限されている現状に言及があった。郭先生との懇談後、林さんを含め2名の中山大学の学生がキャンパス・ツアーを買って出てくれた。食べ物が入っているビニール袋や鞆を狙うと言われる猿の出没を警戒しつつ、キャンパス・ツアーで最初に訪れた図書館では、館員による館内の案内を受け、特に2017年12月に亡くなった台湾文学の宝と称される詩人余光中氏の展示の見学に多くの時間が割かれた。余光中氏は、中華圏の文壇で作品を発表し続け、台湾現代文学の発展に貢献し、国立台湾大学や香港中文大学等の他にこの中山大学でも教鞭を執っていた。台湾文学と言えば、多様な言語、文化、民族の結節点として歩んできた歴史がある。戦後間もない頃の文学言語は北京語をもとにした標準中国語であったが、87年の戒厳令解除後の民主化で、話し言葉を取り入れた文学作品が数多く書かれるようになる。話し言葉は台湾土着の中国系住民が話す台湾語や客家語、先住民族が話すアウストロネシア語族の系統に属する言語である。最近ではこのような台湾の文学世界に、移民、高齢者貧困、LGBT問題のような現代的テーマの作品が加わり台湾文化の多様性の象徴となっている²⁾。

キャンパス・ツアー後、中山大学近くの丘の上に建ち高雄港内を一望できる打狗英國領事館文化園區（打狗は高雄の古称）を訪問。同領事館の役割の他に、イギリス領事であったロバート・スウィンホー（Robert Swinhoe）の足跡や功績が、パネルや写真で紹介されていたのでそ

²⁾ 「台湾文学 アジアの交差点」『日本経済新聞』2019年1月19日。

れらを見学する。スウィンホーは清代に台湾領事として台南赴任後、当時交易で栄えていた淡水のイギリス領事館を再建し（後日訪問する淡水の領事館跡については後述する）、その後ここ打狗で活躍している。外交官としても優秀な人物であったが、それよりも台湾の鳥類、魚類、昆虫の新種を発見し、それらをヨーロッパに紹介した博物学者として知られる。領事館跡から階段を下りていくと、途中スウィンホーが台湾固有種発見・命名に果たした功績を称える像が迎えてくれた。さらに下って港に着くと、対岸の旗津に向かう小型フェリーに乗船する。フェリーには *foot passenger* だけでなく車やバイクも乗り込み、時間帯によっては長い列ができる。わずか 10 分の乗船であるが、旗津では、道路からも直接お祈りができるほどの近さにあり通りに開かれた媽祖を祀る旗津天后宮（高雄で最古の媽祖廟）を訪れ、同時に廟の周りで客足が絶えない海鮮料理店が並ぶ通りを散策した。媽祖は、漁業や航海の安全を司り、港町高雄には相応しい信仰対象である。蔡英文政権以前には、中国本土からの観光客が通りに溢れていたとのことである。長らく民進党が市政を担ってきた高雄市で、今回の地方選挙では民進党候補が敗れたが、中国政府とのぎくしゃくした関係がもたらす観光客の激減も、敗北の原因の一つであったと考えられる。

翌 25 日、高雄市では、与党・民進党市長候補の陳其邁氏を破った国民党の韓国瑜氏の市長就任式が、愛河を挟んで盛大に挙行された。高雄は民進党の地盤の 1 つであったが、我々の高雄滞在中の 24 日に投開票された統一地方選挙では、台湾独立か中国との統一かの問題の議論よりも、経済振興に重点的に取り組む姿勢を強調した国民党候補に支持が集まる結果となった。高雄の経済の低迷が有権者の不満の根底にあったことは否めない。ガイドの陳さんの話では、かつて高雄は台湾一の高給取の町であったが、今は順位が落ちて、その辺りも今回の選挙結果に影響しているのではないかとのことである。戦後国民党による二・二八事件の白色テロで最も犠牲者の多かった高雄において、国民党軍人出身の韓国瑜が市長に当選したことは驚きだとの評もあった。中国習近平政権の台湾に対するアメとムチ政策の影響もあるが、それだけ高雄の経済が低迷して市民に不満が蓄積していたということであろう。韓国瑜が政党色を薄め、戸籍所在地での投票が義務付けられる台湾で、ネットによる台湾北部都市部在住の「北漂族」にターゲットを絞り、「韓流」ブームを作り出す選挙をしたことも、国民党嫌いの高雄で彼が受け入れられた理由であるとの分析もある³⁾。その後今年 3 月 22 日に韓国瑜市長は、中国の香港出先機関である「中央政府駐香港連絡弁公室」を訪問し、弁公室トップの王志民主任と会談している。この会談に対し、香港の民主派や台湾与党・民進党の懸念や批判の声が相次いでいる。4 月に入って韓国瑜は、2020 年 1 月に予定される台湾総統選挙の国民党内予備選に出馬しない

³⁾ 「中国は台湾を内部崩壊させるのか」『日経ビジネス』2018 年 11 月 28 日。

意向を表明した。高雄市長に就任したばかりでありながら国民党の最有力候補でもあった韓国瑜の党内予備選不出馬表明の結果、現状では先日国民党からの出馬を表明した鴻海精密工業会長の郭台銘が国民党の最有力候補となっている。シャープを買収し中国でも大きく事業を展開する鴻海会長が総統になると、中台の接近が促進されるのではと懸念する声も多い。しかし、韓国瑜も予備選には出馬しないとしつつ、総統選に出馬しないとは言っておらず、かえって憶測を呼ぶこととなった。

ところで、陳さんは現在台北近くの桃園市に住んでいるが、もともと客家の出であるとのこと。台湾北部では桃園市や新竹市に客家人が多く住む。彼等は客家語も理解し、ユネスコの世界遺産となった福建土楼の印象から福建省出身者が多いのかと思いきや、陳さんの祖先は広東省から台湾に移住してきたようである。それ以前の 17 世紀から福建人が台湾に移住し、彼等はいわゆる台湾語（台語即ち台湾閩南語、福佬語とも呼ばれる）を話す。福建人が先に中国大陆から来て良い土地を確保したので、遅れて台湾に移り住んだ広東人客家は、山の方に追いやられたと陳さんは解説する。人数の多い福佬系の人々との摩擦を避けるため、丘陵地帯に居住するようになったようである。この福建人と客家人が基本的に本省人を構成する。使用言語別では、福佬語と客家語の 2 系列である。もちろん、山岳部には台湾原住民が住むが、彼等については後述する。原住民、福佬人、客家人、外省人は、四大族群と呼ばれる。たまたまこの日、台湾の国会に当たる立法院では、「国家言語發展法」が可決成立した。この法は、台湾で使用されている様々な民族の言語を平等と位置付けるもので、言語文化の多様性を尊重し、結果的に北京語の圧倒的優位を覆す法律である。台湾の土着文化の復権という文化面での「本土化」の一環である。台湾では 2000 年から全国一律に各族群の言語文化の継承を目的とした「郷土言語」選択必修科目化が実施され、さらに「大衆運輸工具播音語言平等保障法」（2000 年）や「通訊傳播基本法」（2004 年）等で、公共交通やマスメディアにおける多言語多文化の方向性が示されてきている⁴⁾。今回の「国家言語發展法」は、そのような政策の集大成とも言える法制である。台湾の長い戦後史の文脈で読み取ると、中国国民党政権（外省人）支配に対する台湾人の反乱として記憶される二・二八事件のしこりを、一部解消する措置と見てもよからう。ところで、1947 年の二・二八事件と 1949 年の国共内戦での国民党政府の敗北は、台湾が中華民國の本土となり、台湾が「台湾」であることが許されなくなった切っ掛けとなった事件である。蒋介石、蔣経国時代の国民党政府は、台湾人の台湾化を促す機会とも成りえる「台湾史」を徹底的に排除していた。台湾史研究が復活するのは、李登輝政権による民主化政策が進められるよ

⁴⁾ 石垣直「現代台湾の多文化主義と先住権の行方 — <原住民族>による土地をめぐる権利回復運動の事例から —」『日本台湾学会報』第 9 号（2007. 5）199 頁；菅野敦志「台湾における「本土化」と言語政策 — 単一言語主義から郷土言語教育へ —」『アジア太平洋討究』No. 12（2009. 3）。

うになってからである⁵⁾。台湾史の復活も、言語を含めた台湾土着文化の復権と無関係ではない。

我々は市長就任式の少し前に高雄市を離れ、貸切バスで北上して多くの古跡を持つ台南市に向かった。台南市に入ると海沿いの安平工業団地の中を北上し、まず 1668 年に創建され台湾最古と言われる媽祖廟「安平開台天后宮」を訪れ、地元の人々の礼拝の順序を観察する。跪くために置かれた厚手のクッションの前には、やや小ぶりながら凜として髭をたくわえた黒い鄭成功の像が鎮座する。次に媽祖廟の隣に位置する安平古堡に入り、オランダが 17 世紀にこの地に要塞ゼーランドディア城 (Zeelandia、熱蘭遮城) を建設し、台湾南部に植民地支配体制を確立させた時代に思いを馳せる。1662 年 2 月 1 日、鄭成功がオランダと平和条約を結んだ後、彼が留まったのもこの要塞である。現在は煉瓦で固められた南側の城壁しか当時の遺跡は残っていないが、蔓やガジュマルの枝の浸食はあるが、何とか保存されている。現在砦は安平古堡史蹟公園となっており、鄭成功碑には、「民族英雄」の碑銘がある。次に、主に日本で活躍した台南出身の経済評論家邱永漢の出資で 1979 年に開館した熱蘭遮城博物館を見学。オランダは 1653 年にゼーランドディアの対岸に、プロヴィンシア城 (Fort Provintia、紅毛城) を建設する。プロヴィンシア地域は、1625 年にオランダによる最初の地域整備計画として建設された。現在ではゼーランドディアからは陸続きであるが、当時は 4 キロ離れた 2 つのオランダ要塞の間には海があり、船での航行が普通であった。このプロヴィンシア城が今日の赤嵌楼 (Chihkan Tower) である。レンガで仕上げられたかつての城の正門部分 (と言っても殆ど城の基盤部分に見える) や基礎部分の一部がオランダ統治時代からのものであるが、楼閣をはじめ同城の大部分は大地震等で全て倒壊している。現在は交通量の多い道路やビルに囲まれ、周りに当時の面影は微塵もない。一階の展示室には、オランダ人による台湾占拠時代 (1624~1662 年) の基本資料の 1 つである『ゼーランドディア日誌』の中国語訳『熱蘭遮城日誌』が展示されていた⁶⁾。その後、バスの中からではあるが、日本統治期に遠藤写真館がかつてあった通り (打銀街) を確認した。さらに、修復中の孔子廟や、日本統治期に台南市庁舎の一部が入っており現在は国立台湾文学館となっている欧風建造物前をバスで通過。この近くには、訪問は叶わなかったが、台湾独立運動家でその人生の大半を日本で過ごした王育徳の記念館が 2018 年 9 月に開館している。筆者が大学時代に読んだ唯一の台湾関連書が彼の『台湾—その苦悶する歴史』であった。2014 年 3 月に国民党政府が中国との「サービス貿易協定 (兩岸服務貿易協定)」の締結を非民主的に強硬決議しようとしたことに抗議して一時立法院を占拠した「ひまわり学生運動 (太陽

⁵⁾ 檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾 東アジアの国際政治と台湾史研究』中京大学社会科学研究所、21-22 頁。

⁶⁾ この日誌は、オランダ語で書かれた De dagregisters van het Kasteel Zeelandia を中国語に訳したもので、台南市政府によって刊行された。



八田與一像

花學運)」の学生達も、この書の読者であったと聞く。バスは台南市を後にし、次の調査地である烏山頭水庫に八田與一の功績を追った。

台湾の教科書でも紹介されている八田與一であるが、彼の指揮のもと 1920 年から 10 年あまりの歳月を費やして築かれた烏山頭ダムは、嘉南平野の水利を著しく改善させた。ダムの放水口近くに設けられた八田技師記念室で八田の業績に関するビデオを鑑賞した後、昭和 17 年 5 月陸軍の依頼でフィリピンへの水利開発実地調査に向かう船が米潜水艦に撃沈され命を落とした八田與一の像と、昭和 20 年 9 月 1 日に放水路に身を投げて命を絶った外代樹夫人の墓碑（與一の墓でもある）の前で夫妻の努力に思いを馳せる。嘉南大圳水利組合によってダムの北側に建立されたこの八田像は、狂信的な中台統一派政治団体に所属する元台北市議によって首を切り落とされたが、現在は頭部損壊部分の修復は済んでいる。そう言えば、今回中山大学に向かう途中の高雄市内の道路で、我々のバスの前を中国国旗「五星紅旗」を掲げ音楽を流しながら進む車があったが、ガイドの陳さんによれば、台湾には表現の自由が保障されているため、しばしば見られる光景とのことである。大音量で勇ましい軍歌等を流しながら街を走る日本の右翼街宣車と比べると、車両も小型乗用車で流される音楽も警戒心を助長しないような配慮からか演歌のようでかわいいものであった。園内の八田夫妻や日本人職員が居住していた日本式家屋の見学を最後に、烏山頭水庫の見学を終える。

ところで、日本の現代大衆文化に憧れる哈日族（ハーリーजूー）の若者や、東日本大震災時の支援以来特に強調される「親日国」台湾といった印象から、日本統治時代に行われた政策

や建築されたインフラ設備は結果的に台湾のためになったと考える日本人は多い。1934 年に完成し当時東洋一の規模を誇った日月潭第一発電所は、台湾の経済発展に貢献し、戦後も利用されて台湾経済を支えているとの見立てである。そのような見解に対し批判的な研究や視点にも言及する必要があるだろう。批判的研究の代表格は、労農派マルクス主義の理論家山川均が著した『殖民地政策下の台湾』であり、矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』であろう⁷⁾。今日日本人が巨大水利設備たる嘉南大圳を取り上げる時は、ほぼ一貫して八田與一の業績の文脈であり、実際に嘉南大圳が台湾人にもたらした困難については語られることがまずない。嘉南大圳と日月潭発電所は日本統治期の台湾で最重要な開発事業であったが、この 2 つの事業については、当時台湾人の間に不満と混乱があったようである。そもそも日月潭発電所については、台湾の電力需要からしてそれ程大規模な電源開発が必要であったのかという疑問が残るし、嘉南大圳にいたっては、通水に問題のあった地域があったほかに、水租（嘉南大圳灌漑区域の特別税）の取り立てが厳しく台南州民に過重な負担が課せられているとして、水租不払い運動が展開されている。さらに嘉南大圳の用水利用に関しては、台湾農民よりも製糖会社が優遇されているとの批判もあった。矢内原は、日月潭発電所と嘉南大圳の大事業を他の官営事業や製糖会社とともに批判している。資金は台湾人からも集める一方で、これら事業から上がる利益は日本内地資本に独占され、台湾の土着資本は排除されていたとの指摘もある。日本統治期の功罪に関する議論では、台湾の学界においても、中国史からの遮断を強調するために日本の植民地支配を肯定的に見てバランスを取る傾向も存在するが、日本独占資本の問題は避けて通れない⁸⁾。漢族系台湾人の対日観は、知日派、外省人、非日本語世代、反日教育世代、民主化世代といった様々な人々が相互に重複し合い、複雑に絡み合いながら共存するが、このような複雑な台湾人の対日意識を理解することが必要である⁹⁾。

烏山頭水庫を後にして快速公路 84 号線に乗り嘉南平原を西に進み、漁港やハイヒール型ガラスの礼拝堂で知られる布袋（Budai）を目指す。日本の高速道路に相当する中華民国直轄の高速公路に対して、快速公路は台湾省が管理する省道である。名目上台湾省の管轄となっているが、実際には省の諸機能は国に移管されているため、高速公路と比べ走行した感じに違いは感じられない。英語でも快速公路は *expressway* と称される。台湾省は、中国大陆に近い金門県及び連江県の島々や、台北、新北、桃園、台中、台南、高雄といった直轄市以外の自由地区（いわゆる我々が台湾と呼ぶ台湾地区）の大きな部分を占めている。途中快速公路 84 号線の両側には多くの養殖池が連なり、北門付近で快速公路 61 号線に入って海岸線を北進しても同

⁷⁾ 山川均『殖民政策下の台湾 弱小民族の悲哀』プレブス出版社、1926 年。矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』岩波書店、1929 年。

⁸⁾ 詳細は、清水美里『帝国日本の「開発」と植民地台湾』有志舎、2015 年、1-13 頁を参照。

⁹⁾ 檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾』4-5 頁。

じような景色が続くが、まもなくして布袋の町に入る。ライトアップには時間の早かった礼拝堂は期待を裏切るものであったが、堤防越しに海を見ると、無数の牡蠣養殖筏が目に入る。布袋の港は牡蠣を筆頭に様々な新鮮な魚を扱う魚市でも知られ、多くの観光客が訪れるようであるが、澎湖島への船の発着港でもある。また布袋は塩田でも知られるが、陳さんによると、布袋よりかなり南に下った七股（Cigu）塩田の方が有名であるとのこと。そう言えば七股塩田近くには、今回の調査では訪れることは出来なかったが、台湾で初めてという「塩」をテーマにした台湾塩博物館がある。さらに、布袋は下関条約締結後の乙未戦争（台湾平定作戦）時の1895年に、伏見宮貞愛親王が指揮する日本軍が上陸した地としても知られ、現在も町には、「貞愛親王殿下御上陸記念之碑」が建てられている。この碑は台湾復権後一旦土中に埋められたが、後に掘り起こされ、2007年に嘉義県の県定古跡に指定されている。1995年に爆破解体された朝鮮総督府庁舎のように日本統治時代の痕跡が次々と破壊されていった韓国と比べ、総督府庁舎（現在は總統府）をはじめ日本統治時代の多くの建造物が残され今日でも利用されている台湾ではあるが、このような抗日の記載もない銘文の碑が今も建てられていることには驚かされる。その夜は嘉義市の文化路夜市で夕食を済ませ同市に宿泊する。夜市の入口中央噴水池には、映画『KANO』でも有名になった1931年全国中等学校優勝野球大会（今日の甲子園大会）準優勝校の嘉義農林野球部の活躍をたたえる投手像がある。嘉義農林野球部の強さの理由として、チームが日本人、台湾人、原住民の混成であった事実を指摘する声もある。現在の嘉義農林は、嘉義大学の敷地になっているとのことであった。



故宮南院

26日は、嘉義市の西、太保市にある國立故宮博物院南部院區（通称故宮南院）を見学。太保市は嘉義県の県庁所在地であるが、台湾では珍しく嘉義市と嘉義県は行政区分上別の行政体である。嘉義市から快速公路82号線を西に進むと、両側には砂糖キビ畑が連なり、しばらくすると嘉義県庁の道路サインが見え、少しすると故宮南院に到着。近代的で広々としたメイン建築の他に人工湖が設けられ、南院はアジアの芸術と文化をテーマにした博物院を目指しているとのことである。アジアの芸術文化の認識に通じる博物館として、アジア文化に焦点を合わせている見地から、印度光明節（Indian Festival of Light）や日本文化の美の紹介、アジア茶文化展、またイスラム教徒用の祈祷室の創設等、館のテーマに沿った努力はされているようである。しかし、故宮博物院が持つ中国由来の器物の展示が限られており、見学を終えて、中国本土の歴史的文物よりは、嘉義の歴史遺物を扱った嘉義文史廳、オランダ東インド会社の徽章 VOC が書かれた「青花 VOC 徽章鳳凰紋盤」、伊万里焼の磁器等大阪市立東洋陶磁美術館所蔵品の展示等の方が印象的であった。そのためか、2015年開館以後の入場者数は伸び悩み、しかも2016年の147万人から翌年には97万人へと大幅な入場者減となっている¹⁰⁾。一部に南院を無用の長物と評する厳しい意見もあるなかで、いくつかの解決策も模索されてきた。台湾高速鉄路公司（高鐵）嘉義駅や台湾国鉄（台鐵）嘉義駅からのアクセスの改善も問題の一つと考えられるが、それよりも、台北の故宮博物院から人気のコレクションを一部移すことが必要と思われる。実際、2020年末から台北の故宮博物院の改修計画に当たり、3年間の改修工事中は、所蔵品を南院に移すとの話もある。中国の歴史的文物がアジアの芸術と文化指向の南院に移ると、文物の中国文化的素地は若干相対化されることは否めない。台湾の四大報の1つで現在は親中の論評が多いとされる『中国時報』は、故宮北院の改修計画は見せかけで、実は本当の目的は、中国伝来の書画や器物を南院に移すことで、故宮の持つ中国イメージをなるべく排除することにあると決めつける¹¹⁾。故宮博物院の所蔵物は、中華民国政府が台湾へ撤退する際に、北京の故宮博物院から精選して運び出した中華の至宝故に、元々政治的な絡みは避けられないが、南院問題も新たに政治的様相を呈してきた。台湾国内における多元融合の族群関係と文化政策を掲げ多元的族群文化の復興を標榜する民進党政権にとっては、このような台湾国内の多元主義のみならず、アジアを取り込んだ多元文化論の議論に持ち込むことは、台湾の独自性と周辺諸国との調和を示唆する点で自党の綱領に合致することになる¹²⁾。

故宮南院を離れ嘉義市で昼食を終えると、北上して虎尾に向かう。虎尾は、かつてゼーランド要塞のオランダが手を焼いた原住民の居住地で、当時は Favorolang と呼ばれていた。

¹⁰⁾ Focus Taiwan News Channel, 14 March, 2018.

¹¹⁾ 『中国時報』2018年11月19日。

¹²⁾ 若林正丈『台湾 — 変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房、2001年、193頁。



虎尾糖廠。手前は軽便鉄道の線路

この地域は昔から砂糖キビ生産が盛んで、日本統治期から製糖が大規模に行われていた台湾糖業公司砂糖事業部虎尾糖廠を訪れる。現在台湾で操業中の糖廠は、ここと善化糖廠の2箇所だけである。虎尾糖廠が運営する砂糖キビ運搬専用の軽便鉄道（かつて大日本製糖虎尾製糖所の専用線）が走る踏切を渡り、工場内の小さな博物館で説明を聞いた。台湾の2箇所の糖廠は、それぞれ年間300万台湾ドルの赤字を計上しており、2糖廠の合計で600万台湾ドルの損益となるが、砂糖の生産を完全に外国に依存することを避けるために（現在台湾で消費される砂糖の80%は輸入）、国の方針として赤字覚悟の精糖であるとのことである。ガイドの陳さんによれば、台湾糖業公司が一番の地主である故に、赤字もそれ程問題ではないとのことであるが、都会の一等地に土地があるのかどうかはわからない。その後、製糖工場の外部と内部を見学。ちょうど軽便鉄道で大量の砂糖キビが運ばれてきたところであった。訪問に当たっては、虎尾糖廠工業工程股の股長（係長）である周炳宏さんにとってもお世話になった。ガイドさんが前もって予約を入れておいてくれたとは言え、突然の訪問にもかかわらず手厚い対応をいただいた。

虎尾から向かった先は、その日の宿泊地日月潭である。途中ヤシの木が群生し、木からはビンロウが取れるという。ビンロウの種子は、噛み煙草のように使われ嗜好品であり、トラックの運転手等に好まれるようである。バスの行く手の右手（南）彼方には台湾烏龍茶の原点と言われる凍頂烏龍茶で有名な鹿谷郷がある。夕闇が迫っていたが、途中台鐵集集線の2つの駅、集集車站（車站は駅の意）と車埕車站に立ち寄った。列車は、日本のローカル線にもある普通

のディーゼル車であるが、集集車站の駅舎は日本統治時代のものであり、駅前広場は夕暮れを呑気に過ごす地元民や観光客で少し賑やかであった。1999 年 9 月の台湾中部大地震で倒壊した駅舎を再建したとのことであるが、そのような惨事が信じられないほどの町ののどかさである。一方、車埕車站は、集集線の終点駅であるが、かつては木材やダムの建設資材の運搬のために、翌日訪れる埔里（プーリー）まで軽便鉄道が走っていたようである。日月潭に到着した頃には周りは暗くなり、途中通過した文武廟は、「文」の神である孔子と「武」を代表する関羽、岳飛を祀る台湾最大の廟であるが、バスで通過した時には煌々とライトアップされていた。夕食を終え、ホテル前の土産物屋「日月茶行」の女将から、次々と出される試飲の台湾茶を飲みながら、台湾茶の講習を受けた。特に日月潭の南にある阿里山や玉山の高山茶は、高地での栽培であるためすっきりと軽く香りもあり、「原始的な味」との評価もあった。同じ半発酵茶ながら発酵度が低く緑茶のような味わいの凍頂烏龍茶と阿里山茶、そしてアッサムの名前に魅かれ日月潭・貓囀山の阿薩姆（アッサム）紅茶を買ってホテルに戻る。店の女将が出してくれた阿薩姆茶は、カテキン分が高く重厚でコクのあるインド式の甘く煮出したチャイとは違い、上品な *stewed tea* の味わいであった。インドではかつて良質の茶葉は国外に持ち出され、庶民はダストティー（くず茶）をミルクと煮出して飲んでいたが、日月潭の阿薩姆茶は上品な味と香りを持つ。紅茶と言えば、今回は訪れることが出来なかったが、いつもお世話になっている日東紅茶は、日本統治時代に台湾北部の桃園にルーツがあった。当初は三井紅茶と呼ばれ、最初に始めた烏龍茶の製造が芳しくなく、紅茶に切り替えて道が開け国際的評価を得たわけである。現在は、2010 年に台湾農林股份有限公司が再建に着手し「大溪老茶廠」の名称で観光地となっているが、桃園市の南に位置する大溪については後述する。

翌 27 日は、日月潭の湖面を一筋の雲が連なる静寂が始まる。蒋介石が愛し別荘を築いたことでも知られる日月潭であるが、なるほどと思わせる朝の光景である。この日は、台湾原住民の伝統文化を紹介する九族文化村の見学から始まる。遊園地やヨーロッパ・ガーデンもあり、家族でも楽しめる正しくテーマパークであるが、我々の関心は九族集落エリアである。九族とは本来自分を中心に先祖と子孫各 4 代の親族を指すが、九族文化村の九族は、文化村開園時に台湾の原住民族は、9 つ認められていたからその名がある。現在は、16 部族が政府公認になっている。その後の公認原住民族の増加によっても九族文化村の名称に変更はない¹³⁾。2015 年の統計では、台湾人口の 2% が原住民であり、アミ族の約 20 万人を筆頭にパイワン族、タイヤル族が続く。最も先住民が多い県は台東県である。西部平地には平埔族（かつては平埔蕃との蔑称と呼ばれる）と称され漢化が進んでいる原住民もいる。漢民族との同化が進んだということ

¹³⁾ 詳細は、Formosan Aboriginal Culture Village, ed., *Reflections on Taiwan's Indigenous Cultures* (Nantou County, 2014), 3rd edition を参照。

であるが、逆に言うと台湾の漢民族の多くは平埔族の血を継いでいることになる。一方、サオ族やクバラン族のように、平埔族の中でも原住民として公的に認定されている部族もある。漢化政策は清代、そして日本統治期後の中国国民党の台湾支配で顕著に見られる。日本統治期には、原住民は高山族と平埔族に区別され、前者は高砂族と改称されている。高砂族の若者は太平洋戦争中旧日本軍に従軍し、高砂義勇隊としてフィリピンやニューギニアの密林戦で戦っている。高砂義勇隊の兵士は軍人ではなく軍属の地位にあったが、実際には戦闘に加わり、多くの犠牲者を出している。2016年には現総統蔡英文が、これまでの原住民に対する不平等な扱いに対して総統として初めて謝罪をしている。それが現政権下での上記「国家言語發展法」の成立に繋がったと言えよう。ガイドさんの話しでは、近年では原住民に認定されると補助金が出たり、大学入試や就職で特定枠が設けられる優遇策があったり、保留地を国からもらえるなど手厚い保護を受けられるとのことであるから、以前と比べ原住民族の待遇は大いに改善され、彼等の権利や文化保護が大きく前進したことになる。例えば、2001年に施行された「原住民族就業権保障法」では、各レベルの政府機関、公立学校、公営事業機関において、被雇用者 100 人毎に 1 人の原住民の雇用が義務付けられており、「原住民地区」の各政府、公立学校、公営事業機関の職員にいたっては、三分の一以上が原住民でなければならないとしている。また、2003 年の「自由貿易港区設置管理条例」では、区域内で雇用する労働者の 5 % を原住民とすることが規定されている¹⁴⁾。台湾版 **affirmative action** と言って差し支えなからう。

本来ならばホテル近くの日月潭ロープウェイで上がり、九村文化村の集落エリアを上から下りながら訪れる予定であったが、ロープウェイの運行開始時間より 1 時間ほど早く当日の活動を始めたため、予定の逆コースをたどり、集落エリアを下から上りながら攻略することとなった。体力的にはきつい登りのコースであったが、まずは、神話に基づいた矮人祭歌舞祭儀で有名な小部族サイシャット族（賽夏族）の区画を見学する。次に南投県と花蓮県にまたがって居住するセデック族（賽德克族）の住居を見るが、1930 年の抗日蜂起事件で有名な霧社事件に関わったのもこの部族である。ガイドの陳さんからは、霧社事件をテーマに 2011 年に作られた台湾映画『セデック・バレ』が紹介された。かなり過激なシーンも多い 2 部作 4 時間半の超大作である。家屋の前には獣頭部の骨がいくつも誇らしげに竿に吊るされていた。その後、他の原住民族同様に首狩りや刺青の伝統を持っていたタイヤル族（泰雅族、別名アヤタル族）、山岳農業や狩猟で生計を立てていたツォウ族（鄒族）の家屋を回る。彼らの建物の中にクバと称される男子のみが参加する会所の模型があったが、厳格な父系社会であったツォウ族の象徴と言えよう。皮革の交易で有名な部族らしく鄒族皮雕工坊があり、観光客の関心を引いていた。筆

¹⁴⁾ 石垣直「現代台湾の多文化主義と先住権の行方」199 頁。

者がこの部族に興味を抱いた理由の一つは、阿里山周辺の高山部族であるが、ツォウ族の分布は南投県、嘉義県、高雄県に及び、先述の **Favorolang** でオランダを悩ました原住民は、ツォウ族であると考えられるからである。この地域は鹿狩りと鹿皮のなめしで知られており、17 世紀には同族も皮革の交易で生計を立てていたであろうし、彼等の革加工技術は他の原住民族を上回るものがあった。オランダとの戦闘を考えると、最も勇猛な部族としてタイヤル族が挙げられるが、彼等の居住地は台湾北部に位置する¹⁵⁾。日本でも活躍するビビアン・スーの母親がタイヤル族出である。その後、原住民で最も人口の少ないサオ族（邵族）、政治行政機能のみならず教育や軍事の問題解決を担う男子会所組織が存在する一方で、長女が家督を継ぐ母系社会であるプユマ族（卑南族）、台湾原住民のなかで唯一島嶼部（台湾本島の南東沖の孤島蘭嶼）に居住するタオ族（達悟族）、さらにはアミ族（阿美族）、パイワン族等の家屋を見て九族文化村の頂上に到達する。そこから日月潭ロープウェイに乗り、終着駅の日月潭湖畔から次の調査地霧社に向かう。

霧社に着くと、まず霧社事件記念公園を訪れ、事件の首謀者で抗日蜂起を指導したセデック族マヘボ社の頭目モーナ・ルダオ（莫那・魯道）の立像と墓、そして霧社事件の記念碑を訪れた。立像には、1990 年代中期に南投縣の縣長を務めた国民党の林源朗の字で、「抗日英雄 莫那魯道」と彫られていた。戦後国民党の下で、この事件が、日本植民地主義の圧政に対する英雄的な抵抗運動として評されてきたことから、このような碑銘が彫られた背景は想像できる。1930 年の霧社蜂起は、日本統治期の台湾原住民による抗日蜂起であり、日本の台湾統治の負の側面を示す事件である。日本の台湾領有から 35 年が経っていた。これまで日本側に酷使されていた一族が、日本人巡査とのトラブルに端を発して、霧社公学校の運動会で 130 人ほどの日本人を惨殺したが、まもなく日本軍及び警察により鎮圧された事件である。日本人と原住民のセデック族の間に緊張が深まり抗日蜂起に繋がっていったのであるが、セデック族の中でも、マヘボ社等蜂起に加わった 6 部落の他に、パーラン社のように蜂起に加わらなかった 6 部落があり、「抗日蕃」や「味方蕃」という分類が示すように、部族内部にも複雑な関係や経緯が存在した。結果的には、高砂族間での殺し合いという惨状をもたらすことになる。鎮圧に当たって毒ガス使用が話題となったが、宇垣一成陸軍大臣は、催涙弾を使用したとして毒ガス使用を否定している。霧社事件後、台湾総督府は、これまでの理蕃政策の見直しを迫られている。霧社事件は、台湾銀行問題とともに昭和期に帝国議会で台湾が話題となった事件の 1 つであった。後者は、昭和金融恐慌が始まると、総合商社「鈴木商店」に多額の融資をしていた台湾銀行が休業の危機に追い込まれた問題で、台湾銀行救済のために第 53 回臨時議会被開かれ善後処置

¹⁵⁾ タイヤル族については、菊池一隆『台湾北部タイヤル族から見た近現代史：日本植民地時代から国民党政権時代の「白色テロ」へ』集広舎を参照。

が取り決められた¹⁶⁾。一方、山地警察官の圧政、強制された過酷労働、原住民族とのトラブル等、多重の原因があった霧社事件については、第 59 回帝国議会の会期中に石塚英蔵台湾総督が引責更迭されている。日本の台湾統治 50 年間で総督が更迭にまで及んだのはこの一件だけである¹⁷⁾。記念公園から少し歩いて、事件が起きた霧社公学校があった台湾電力の敷地を探した。電力会社の社員も知らないとのことで、近くの自然史教育館のスタッフにも尋ねたが場所は特定できなかった。我々のバスが駐車した道の上には、遺骨が発掘されたという仁愛郷公所が建っていた。

次の訪問地は、台中に向かう途中の町埔里（プーリー）である。埔里では、希望者だけ世界各地の有名な蝶や昆虫の標本で知られる木生昆虫博物館で調査をし、本隊は、紹興酒で有名な酒造工場「埔里酒廠」を訪問した。工場と入っても併設されている酒文化館では、埔里酒廠の歴史がパネルや展示で紹介されていた。日本統治期の 1901 年に日本政府は台湾総督府専売局を設立し、続いて台湾に酒税を導入している。1917 年に「埔里製酒株式会社」が作られ、台湾人のための米焼酎と日本人の好む清酒を醸造したとある。その後台湾総督府によって酒類も煙草、塩、石油等と同様に専売制度の中に取り込まれると、民間による酒造が禁止され、同株式会社は総督府に買収されている。日本統治後、埔里酒廠では米焼酎や太白酒のみを製造していたが、1949 年に浙江省から戦乱を避けるために紹興酒店の周景文、周景山兄弟が埔里に移り住むと、埔里酒廠は紹興酒の研究と生産に取り組み、低級酒の生産を止めて紹興酒専門酒造に生まれ変わり、今日の地位を築くことになる。女兒が生まれると紹興酒を購入し、その子が嫁に行くまで寝かせて、結婚式の当日に嫁ぎ先に持参したり、饗宴で飲んだりする女兒紅と呼ばれる浙江省の習慣を台湾も引き継ぎ、埔里酒廠でも「女兒紅」は売れ筋の銘柄である。

28 日は、まず台中市の西にあり最近注目を集める彩虹眷村（Rainbow village）に向かう。途中高鐵台中駅近くで台湾高速鉄路（いわゆる台湾版新幹線）の下をくぐる。ガイドの陳さんは、（日本の）新幹線と何度も呼ぶが、所詮は日欧混在システムであり、最終的には新幹線部分は全体の 7 割程度を占めているらしい。台湾側は世界の鉄道技術の良いところを集めたベストミックスと主張するが、分岐器等欧州製機器に様々な不具合が生じていると聞く。白地にオレンジの線が走る車輛は 700 系の改良型であるので、色違いの日本の新幹線が走っているよう

¹⁶⁾ 洋糖商人として神戸に創業した鈴木商店は、現在の KOBELCO や総合商社双日等のルーツの 1 つであるが、平定直後の台湾に進出し、総督府民政長官後藤新平との密接な関係もあり樟脳油の販売権を獲得。それを基盤に台湾において資本蓄積を進めた。矢内原忠雄は『帝国主義下の台湾』の中で、三井・三菱と並んで鈴木商店のような内地独占資本が製糖業をはじめとする台湾の全産業を支配していると述べているが、前者は内地において蓄積した資本でもって台湾に進出したのに対し、鈴木商店は台湾を出発点として資本蓄積事業拡張を行ったと両者の違いに着目している。後藤の仲介による台湾銀行との関係は、鈴木商店の台湾での事業拡大を金融面で支え続けた。齋藤尚文『鈴木商店と台湾——樟脳・砂糖をめぐる人と事業——』晃洋書房、1・8 頁。

¹⁷⁾ 河原功解題『台湾総督府第六十回帝国議会説明資料 第 1 冊』不二出版、1・4 頁。

で、遠くに走行中の車輛が見えると妙に誇らしい。嶺東科技大学のキャンパス近くにある彩虹眷村は、軍人村であり老朽化が激しくて解体予定であったが、ある老人（黄永阜さん）が家屋に描いたかわいい絵画がネット上で評判になり、我々の訪問時も観光客でごった返していた。正直なぜこれほどまでの人気になったのか、やや不思議に思ったが、嶺東科技大学関係者の広報協力もあったとのことである。この辺りには軍属の家族が多く住むと聞く。蒋介石の国民党軍として台湾に渡ってきた頃からの兵卒とその家族である。彩虹眷村訪問の2日前の26日、台湾では徴兵制から志願制への全面移行が完了し、60年以上続いてきた徴兵制に事実上の終止符が打たれた。少子化問題で予定よりも志願制への移行が遅れたが、国防部によると、必要な総兵力18万8千人の約8割は志願兵でまかなうことができ、徴兵制廃止に目途が立ったとのことである。我々の帰国後の1月2日に蔡英文総統は、一国二制度を台湾は絶対に受け入れないとの談話を発表している。同じ日北京では、習近平国家主席が、「中華民族の偉大な復興へのプロセスにおいて台湾同胞を欠くことはありえない」と訴え、武力行使も選択肢にあるとの立場を表明している。習近平の脅しとは言え、この時期に台湾が志願制に移行したことが正しい選択かどうかはわからない。台湾の若者も経済的豊かさに浸り、さらに少子化の問題もあり、もはや徴兵制を維持することが難しくなっているようである。その反面、志願兵だけの方が戦力的には効率的であるとの意見もある。

彩虹眷村を後に再度台南市に入って見学した台中国家歌劇院は、プリッカー賞を受賞したこともある伊東豊雄氏の斬新な設計で知られ、建物内部も曲線を多用した広々とした空間で、多くの日本のコンサート・ホールの狭いロビーと比べると別世界であった。そう言えば、台南から台中に来ると、道が急に広くなり、近代的建物も多くなったことが印象に残る。綺麗に整った街という印象である。次に台鐵台中駅近くのインスタ映えするスイーツ店「宮原眼科」で小腹を満たし、当店定番のお土産であるパイナップル・ケーキを買い込んで、バスは高速公路1号線を一路台北方面に向かう。

台湾のシリコンバレーと呼ばれる新竹市を通過した頃から、なんとなくのんびりした台湾中南部から、急にせわしい産業都市にやってきた感があり、さらに天気も、暖かく晴天が続いた亜熱帯気候から、雨模様で風も強く寒さを感じる気の滅入るような天候に突入した。台湾のIT産業は、我々の世代には馴染深いエイサーやエイスースが中韓勢の台頭で後れをとり、決め手の受託生産事業でも半導体受託生産の台湾積体電路製造（TSMC）やシャープを買収した鴻海精密工業でさえ頭打ちで落日感があるが、新竹から台北にかけて低く垂れて覆う暗雲が、台湾企業の現状を象徴しているようである。半導体を生産する台湾の受託生産企業の中国依存は高まるが、突然の政策変更によるリスクがあるのが中国市場であり、中国生産の収益貢献度とこのようなリスクのバランスの見極めの難しさは、日本の装置メーカー同様台湾企業にとっても

悩ましいところである。また、米中貿易戦争の中で、自前の半導体産業育成に向けて中国政府は大きく舵を切ったが、そのような動きの過程で、台湾の給与の2～3倍の高給で技術者の引き抜きを中国企業が行っているとの噂もあり、台湾企業を神経質にしているようである。

空港のある桃園市を超え、後述する淡水河を渡り、左手に中国宮廷の豪華な様式を誇る圓山大飯店、右手に台北中心部や台北松山空港を見て、基隆近くを通過して目的地の瑞芳に到着。台鐵瑞芳駅から十分車站まで台鐵平溪線に乗車する。基隆河に沿ってのローカル線のゆっくりとした短い旅である。古いディーゼル車は、日本車輛製造の日本製であった。十分車站では、商店が並ぶ老街の真ん中を線路が走り、列車が通過する合間に各自の願いを書いた天燈を大空に放つという観光客に人気のスカイランタンを体験。平溪線は、もともと日本統治時代に炭田開発のために台陽鉱業が出資して敷設した運炭専用線である。周りは暗くなりかけていたが、この日もう一つの訪問地、金瓜石（きんかせき）鉱山跡に向かう。かつては東北アジア第一の金鉱山と言われてきたが、現在は廃坑となり、黄金博物館などを建造して観光地化している。鉱山跡に到着した頃には辺りは真っ暗で、鉱山跡地を日本統治期の写真を思い浮かべながら闇の中に想像するだけであった。瑞芳、九份、金瓜石地区は、下関条約調印後の台湾平定作戦で、台北への最短距離にある淡水への上陸をあきらめた日本軍が上陸侵攻し、それほど激しい戦闘ではなかったと聞かすが、抗日軍の攻撃を受けた地域である。訪れることはできなかったが、日本軍上陸地は、瑞芳から南東に行った海岸線新北市貢寮区澳底である。日本統治期には「近衛師団上陸記念碑」と彫られた碑が建てられたが、現在では「鹽寮（塩寮）抗日記念碑」となっている。台湾平定宣言は1895年11月18日に樺山資紀初代台湾総督から大本営に対して出されているが、抗日軍の抵抗は激しく、漢族系の抵抗をほぼ平定したのは1902年になってから、原住民が暮らす山岳地帯の制圧は1905年頃までかかっている¹⁸⁾。台北に向かう前に近くの九份に立ち寄る。『千と千尋の神隠し』の世界を想起させるとして日本人観光客にも人気の町であるが、ランタンの連なる階段を駆け上がり、有名な阿妹茶楼の夜景もきっちり写真撮影。その夜は台北の士林夜市で食事の予定であったが、雨も降りだしたため急遽予定を変更して、台北のランドマークタワー「台北101」の地下にあるフードコートで混雑の中慎ましく食事をとった。

29日は、朝から基隆の和平島（日本統治期は社寮島と呼ばれる）を調査。現在は海浜公園となっているが、かつて1626年にスペインがサン・サルバドル城を築城して基隆の港への入り口に位置する同島を占拠、さらに1628年には淡水に泥と竹と木を使ってサン・ドミンゴ城を築城する。淡水はスペインにとっては、商業、軍事、宣教、政治的活動の中心となった。しか

¹⁸⁾ 大谷正『日清戦争』中公新書2270、223-33頁。

し、1635年に台湾南部に拠点を構えるオランダ東インド会社により駆逐されスペインは撤退。オランダはそこにアントニオ砦（Fort Anthonio、砦の名前はオランダの東インド会社総督アントニオ・ファン・ディーメンに因む）を構築。一方基隆は1642年まで持ちこたえるが、結局オランダがスペインに代わって支配し、1668年に鄭氏政権によって占拠されるまで、オランダの台湾北部統治の拠点となった。基隆は日本に一番近い立地のため、かつては日本との交易で栄えた。日本統治時代に台湾総督府は、基隆を台日貿易の中心に育成し、淡水を始めとする台中交易に取って代わらせる政策の下、日本に最も近い基隆港での海運の急速な発展を期してドック建設を進めた。台湾と内地を結ぶ玄関口としての役割のみならず、台湾植民地経済を支える東アジア有数の国際貿易港として、基隆での船舶出入数量及び貨物輸送量は大幅に増加したのである¹⁹⁾。しかし実際は、1910年以降台湾の港湾で貨物取扱量第1位の座は高雄に奪われたままである。清朝期に栄えた淡水であったが、日本統治期には、砂の堆積で大型船の入港が困難になったことも、淡水が基隆に台湾北部での主要港の地位を明け渡した原因の一つと言われている。しかし、淡水の付属港として1862年に開港した基隆も、台湾植民地化直後は依然として湾内は浅く泥土に埋もれ、風浪高い折には、沖合での停泊にも不安を抱かせる状況で、価値の乏しい港であった。大型汽船の停泊が難しく、例えば台湾生産の烏龍茶の殆どは廈門に搬出され、そこから遠洋航海用大型汽船に積み替えられて、北米市場に輸出されていた。集散地としての基隆の機能が著しく高まったのは、第1次世界大戦前後期における「広域的公共財」の整備によってであり、基隆を集積地とする流通ネットワークの形成は、1920年代の日本・台湾・華南を接続する取引を構造化した²⁰⁾。

ところで、台北と基隆間の鉄道の敷設は、淡水の凋落に拍車をかけた。今でこそ淡水へは台北中心部からMRTで直接アクセスできるが（我々の淡水訪問時は、MRTの試験運転中であった）、当時の淡水は台北からの近さにも拘らず、陸の孤島であったと言ってよかろう。バスで基隆港に沿って基隆中心街から和平島に向かうと、昔日の台湾を思わせる港町の街並みや住居が続く。港の両側から山が迫ってくる地形は、貨物基地の拡張には適さず、高雄のように港湾に隣接した埋め立て地に輸出加工区（高雄には中島輸出加工区等がある）を建設するスペースもない。両側に迫る山の間の基隆港は、以前人文研総合研究旅行で訪れた長崎港をも想起させる。バスは社寮橋を渡って魚市場前を通り狭い道を進むが、この島の南西側には今は住居が取り払われているがかつて琉球人集落跡があり、最盛期には500余人の琉球人が居住して一漁村を形成していた。島内のバス駐車場に着くと、隣に一見閑散とした中規模造船所があった。長崎

¹⁹⁾ 蕭明禮「日本統治時期における台湾工業化と造船業の発展」『社会システム研究』第15号（2007年9月）69頁。

²⁰⁾ ハヶ城秀吉『帝国日本の流通ネットワーク 流通機構の変容と市場に形成』日本経済評論社、55、77、105頁。

の三菱重工長崎造船所と比べるとかなり規模は小さいが、中韓の造船所の興隆に押され気味の三菱重工を含めた日本の造船業と光景が重なる。この造船所は台湾唯一最大の造船会社「台湾国際造船股份有限公司」（旧中国造船公司、股份有限公司は株式会社の意）の基隆廠で、本社は高雄にある。

和平島を左回りに進むとまず目に飛び込んでくるのが、「琉球漁民慰霊碑」（琉球ウミンチュの像）である。かつて社寮島と呼ばれたこの島は、1905年頃から琉球人漁民の居住地であったが、彼らは台湾人と一緒に暮らし、琉球人（主に久高島漁民）は漁法や造船等の漁業技術を台湾人に伝え、共助の精神で両者は友好的に暮らしていたことから、台湾と琉球の友情の象徴



琉球漁民慰霊碑

としてこの碑が建立されたとのことである²¹⁾。琉球人の中には二・二八事件で死亡あるいは行方不明となった者もいたとの話であるが、その悲劇の経緯は正確には分からない。30人以上の琉球人が事件に巻き込まれ、現在のところ4人が被害者と確認されているとの報告もある。二・二八事件で思い出すのは、台湾映画『悲情城市』が描く基隆で代々船問屋・酒家を営む林家の人々のことである。二・二八事件の悲劇が林家の家族を襲ったのであるが、台湾人と共助の関係にあった琉球人が、二・二八事件時にどのような行動をとったのか興味がそそられる。映画の最終場面で、林家の四男で聾啞者の文清は、悪名高い陳儀が台湾省行政長官兼警備総司令を務める国民政府によって逮捕され、その後消息を絶ったまま映画は終わるが、和平島周辺の琉球人の一部も同じような運命をたどったのかと想像してしまう。ところで、「琉球漁民慰霊碑」を見た時にさらに脳裏をよぎったのが、場所と状況は違うが同じ琉球人ということで、1874年の台湾出兵の原因となった「琉球漂流民殺害事件」である。1871年強風のため台湾南東岸に漂

²¹⁾ 台湾の琉球人集落は主に台湾の北部や東部の海岸に沿って点在するが、社寮島の集落はその代表的存在である。台湾における琉球人は、支配者として台湾人に対峙しながらも、「日本の生蕃」と呼ばれ、偏見と差別の対象にされるなど、屈折した複雑な状況下に置かれていた。又吉盛清『日本植民地下の台湾と沖縄』沖縄あき書房、331-40頁。

着した琉球漁民 54 名を「生番（俗に生蕃）」の台湾原住民（パイワン族）が殺害したことを理由に、日本は清国にその責任を問うが、清国は台湾の生番については清国の「化外の民」（統治範囲外の民）であると責任を否定したため、西郷従道指揮の 3600 余名の台湾征伐軍が派遣されるきっかけとなった事件である。台湾出兵は、琉球王国が長年行ってきた清国への冊封関係を廃止させ、武力で日本への統合を強制した「琉球処分」の前段階であった。琉球国と清国の関係を断ち切り、台湾領有への想いを同時に実行できる機会を得たという点では、台湾処分と琉球処分は密接に絡み合った事件であったと言えよう²²⁾。ところで、清朝では台湾原住民は番人と呼ばれ（日本統治期は蕃人、後に高砂族）、その中で漢民族化した民族は熟番、そうでない民族は生番と区別された。これらは、台湾における琉球人をめぐる 2 つの対照的な出来事である。

基隆は 10 月頃より翌年 4 月頃までは連日のように雨が降ると言われるが、「琉球漁民慰霊碑」を後にして強風と小雨の中を侵食によって作られた美しい奇岩（海蝕台）の海岸線に沿って遊歩道を進むと、砂岩に掘られた小さな洞窟が見えてくる。「蕃字洞」（Dutch Cave）と呼ば

れるこの小洞窟は、1668 年鄭氏政權

（1662 年に死去した鄭成功に代わって鄭經が後継者となる）によって追われたオランダ人が隠れたと言われる場所で、洞窟内部にオランダ語で文字が書かれていたのでこの名がある。さらに歩いて基隆港側に回り込むと多数のコンテナ積み込み用のクレーンが見える。観光案内所が入るサン・サルバドル城を模した建物で暖をとった後、基隆市街地を挟んで和平島の反対側の山中にある 1890 年竣工のトンネル跡「劉銘傳隧道」（獅球嶺隧道とも呼ばれる）を調査。清朝期のこの鉄道トンネル跡は、当時の台湾巡撫（最高地方統治官）であった劉銘傳によって推進されたことから、彼の名前が付けられた。日本



劉銘傳隧道

²²⁾ 詳細は、又吉盛清『大日本帝国植民地化の琉球沖縄と台湾』同時代社、275-301、338-52 頁を参照。

統治期には近くに別のトンネルができたためこの隧道は放棄されたが、その後は基隆と基隆河沿いの八堵間を結ぶ隧道として使用され、商人たちは八堵の基隆河の渡船場から水路台北に荷を運んだと聞く。隧道の向こう側には獅球嶺砲台があるが、台湾平定の乙未戦争で、基隆占拠を果たした日本軍が、台北に進軍するのに必ず奪わなければならない要塞であった²³⁾。

淡水に向かう途中、寄り道をすることにした。海辺の金山の町（新北市金山区）から細い道をかなり登って行くと、東シナ海を見下ろす山の上に富裕層のための金寶山墓園が広がる。この広大で豪華な墓園の一角にある、「アジアの歌姫」鄧麗君（テレサテン）が眠る記念墓園に参った。彼女の両親は外省人、父親は元国民党軍の軍人であったが、中国民主化への強い思いを抱いてタイで客死し、台北で国葬が執り行われたことは日本でもよく知られている。鄧麗君は自分の曲の他に、多くの曲を日本語でも中国語でもカバーしているが、我々が墓園を訪れた時に中国語で流れていたのは『北酒場』。やや興が醒めてしまった。淡水に着くと早速淡水河の河口を見下ろす丘に建つ紅毛城を見学。紅毛のオランダ人から紅毛城と称されるようになったこの城は、前述のように、スペインによってサン・ドミンゴ城として 1629 年に築城され、その後しばらくしてオランダの手に渡るが、オランダも鄭氏政権によって駆逐される。その後長い間荒れた状態で放置されるが、清朝末に北京条約で淡水が開港されると、英国はこの地に領事館を置いている。現在残る建物は、オランダ人が建てたアントニオ砦とヴィクトリア様式の旧イギリス領事館の結合建造物である。阿片戦争に敗れた清国は 1842 年の南京条約で香港の割譲と広州、厦門、福州、上海、寧波の開港を受け入れ、英国も翌年上海に中国大陆で最初の英国領事館を開設している。1860 年の北京条約で台湾も通商港として開港され、翌 61 年には先述のロバート・スウィンホーと助手のジョージ・ブラウンが厦門から台南に派遣され、税関と領事館を開設する。しかし、台南の安平港の堆積物問題のため、62 年には領事館は淡水に移設。その後は、打狗、安平（台南）、基隆に領事館が開設されている。

続いて、紅毛城の隣に位置する私立真理大学に足を運ぶ。英語ではギリシャ語の真理を意味するアレセイア（ἀλήθεια）から Aletheia University と呼ばれている台湾最古の西洋式教育施設である。カナダ人宣教師ジョージ・レスリー・マッケイ（George Leslie MacKay）が同校を創立した 1882 年には、理学堂大書院と名づけられ、さらにカナダのオンタリオ州オックスフォード郡の住民による寄付で建てられた経緯から、別称はオックスフォード・カレッジ（牛津学堂）であった。当時台湾南部では英国長老教会が布教をしていたので、マッケイは北部の淡水の地を、キリスト教宣教、教育、医療の地と定め活動を始める。理学堂大書院の中にはマッケイの胸像があるが、「北部台湾基督長老教会開拓者」の碑銘がある。真理大学は台湾基督長老

²³⁾ 詳細は喜安幸夫『台湾島抗日秘史』原書房を参照。



真理大学キャンパス

教会の総合大学であるが、この長老派教会は北京官話が強制された時でも台湾語の使用にこだわり、台湾の人権と民主主義の主唱者でもあった。また、原住民の権利擁護と彼らへの宣教にも熱心であった。ガイドの陳さんによると、1970年代以降、同教会は台湾独立運動に関与し、そのため民進党との関係が深いとのことである。同教会は1970年代に民主化闘争を担う中で、その原動力となる「本土神学」、即ち、教会の宣教を台湾の現実と結びつけ文脈化する神学を提唱して、台湾重視の政治的意味での「本土化」を主張していった。そして、71年から77年にかけて発表された「国是声明」「われわれの呼びかけ」「人権宣言」の3つの声明で、台湾の将来は台湾に住む住民によって決められなければならないこと等を訴えた²⁴⁾。さらにマッケイは、台湾原住民の南方起源説の信奉者でもある。台湾原住民諸語はアウストロネシア語族の系統に属し、東南アジアを起源に持ち、北は台湾を北限として、東はフィリピン、インドネシア、メラネシア、ポリネシアといった大洋州周辺に拡散していったと考えられる。さらに台湾原住民諸語の話者の遺伝子についても、台湾人の約6割の遺伝子はアウストロネシア諸族系の遺伝子を持つとの研究成果もある。もちろん、中国は福建と台湾の先史期からの文化交流を強調し、台湾と南方との諸関係に異議を唱える²⁵⁾。ところで最近中国政府は、欧州で唯一台湾と外交関係を維持するローマ法王庁に接近し、台湾の孤立を狙っている節がある。昨年9月に中国国内

²⁴⁾ 東のぞみ「台湾における原住民教会の歴史と『原住民神学』の形成 —台湾基督長老教会と日本基督教教団との宣教協約の視点から—」『神学研究』関西学院大学、第51号、203-4頁。

²⁵⁾ Michael Stainton, 'The Politics of Taiwan Aboriginal Origins' in Murray A. Rubinstein, ed., *Taiwan—A New History*—(London & New York, 2015), pp. 27-44.

の司教任命権に関し、ローマ法王庁は法王に最終任命権があるとしながらも、中国が独自に任命した司教の正統性を認めるとする暫定合意に達した。このところ中国政府非公認のキリスト教「地下教会」の閉鎖が相次いでいるが、「中国カトリック共同体の一体化」を標榜する現法王フランシスコの時代になって中国側への接近が急である。パチカンが地下教会信者を中国共産党に売り渡そうとしているとの批判がカトリック教会内部からもある中、パチカンと中国との接近の今後の行方は台湾政府にとっても気になるところである。

真理大学を見学後、紅毛城から淡水河畔に降りて淡水海関碼頭園區（淡水税関埠頭園區）を歩く。あいにくの天気で、有名な淡水河の夕焼け（淡江夕照）は見られなかったが、淡水河の対岸には観音山、左の上流には淡水渡船頭や関渡大橋が、右手の河口付近には台北港が見える。清朝と日本統治時代の税関関連の建造物が今に残されている。清朝期には港務局埠頭と英国領事館船屋がここにあり、税関の管轄権が西洋人に譲渡されていたことがわかる。外国人（特に英国人）に海関を管理させる外国人税務司制度が採用され、北京で初代の海関総税務司（Inspector General of the Imperial Maritime Customs Service）には、1854年にホレイショ・ネルソン・レイ（Horatio Nelson Lay）が就任、続いてロバート・ハート（Robert Hart）が引き継いでいる²⁶⁾。海関は、関税の徴収を通じて清朝の財政に関わる非常に重要な仕事であった。淡水海関碼頭からは、上述のように左の上流に関渡大橋が見えるが、そのさらに上流には有名な龍山寺のある台北市萬華区がある。オランダ統治期から萬華は交易の中心地で、さらに上流地域に住む原住民（平埔族ケタガラン族）等との間で頻繁に交流が繰り返されたと言われる。ガイドの陳さんの話では、淡水河水系の河川の1つである大漢溪が流れる大溪（現在は桃園市大溪区）あたりからも、交易のために商人が萬華に下ってきたとのことである。清代に漢人が先住のタイヤル族と折衝して大溪の町が発展し、その後有名な観光名所にもなっている大溪老街の近くを流れる大漢溪を使って木材等の物資が運ばれ、経済拠点として萬華は発展したと聞く。一方、現在の萬華は、治安の良い台北にあって、「裏台湾」とか「台湾黒社会の舞台」とか言われる下町繁華街であるが、もともとこの街には交易港としてそのような猥雑な裏町の側面があったのであろう。淡水老街の散策は時間の関係で叶わなかったが、台北に戻る途中に、マッケイが1880年に設立したマッケイ・クリニック「滬尾（現在の淡水）偕医館」にルーツを持ち、今も台湾基督長老教会と関係するマッケイ・メモリアル・ホスピタル（馬偕記念医院）前を通る。その夜は、有名な台湾料理店「欣葉（シンイエ）」で夕食。

最終日の30日は、本隊が国共内戦や抗日戦等で戦没した英霊を祀る台北忠烈祠と国立故宫博物院を見学し、一部の教員は、台湾の動植物や原住民に関する展示で有名な国立台湾博物館

²⁶⁾ 詳細は、Hans van de Ven, *Breaking with the Past: The Maritime Customs Service and the Global Origin of Modernity in China* (New York, 2014) を参照。

を訪れた。日本統治期に台湾護国神社があった場所に建てられた中国宮殿様式の建造物である忠烈祠では、衛兵交代式の後に本殿を見学する。大殿には入らなかったが、山門両側にある 2 つのレリーフを確認。一つは、失敗に終わったが中華民国建国の切っ掛けとなった孫文の広州蜂起。青天白日旗を持って蜂起に加わる革命戦士達が描かれている。反対側には、黄浦江で日本軍と戦う中国国民党軍が彫られているが、兵士達はドイツ製鉄帽ではなく普通の国民党軍略帽をかぶっている。気のせいかわピストルをもって国民党軍兵士を指揮する人物がドイツ人に見える。清朝期から中国はドイツからの軍事顧問を受け入れ、軍の近代化と精鋭化に腐心してきた。日本にとっては大きな脅威であり長崎事件でも有名な清国北洋水師旗艦の「定遠」や同型艦の「鎮遠」は、ドイツのヴルカン・シュテッティン造船所に発注された戦艦であり、日清戦争時にはドイツ軍事顧問が乗船していた²⁷⁾。中華民国建国後もドイツとの軍事交流は続き、中独合作とまで言われる両国の密接な軍事協力によって、ハンス・フォン・ゼクトやアレクサンダー・フォン・ファルケンハウゼンといった軍事顧問が国民党軍近代化のために送り込まれた。商圈の拡大を狙うドイツ兵器産業の思惑もあり、このような協力体制は、日独防共協定、日独伊三国同盟の締結時まで続き、国民党軍にはドイツ製鉄帽に象徴されるように、ドイツやチェコの近代的兵器が提供され、日中戦争における日本軍の犠牲を飛躍的に増大させたと言われる。忠烈祠は国民革命烈士や国共内戦での戦死者ならびに抗日戦での戦死者を祀る施設であるが、基本的に殆どのいわゆる台湾人とは関係が薄く、「国民党政府主導下で忠烈祠の慰霊は表面的な威厳だけを誇示し、英霊に対する感情が欠如し儀式化してしまった」との意見もある²⁸⁾。衛兵の交代が中心となって観光化してしまった儀礼を見ていると、確かにそのような意見にも一理ありそうに思える。

忠烈祠見学後、故宮博物院に向かうが、忠烈祠の周りは台湾海軍や空軍司令部といった軍関係施設に囲まれていた。国共内戦敗北後、台湾に渡った蒋介石と宋美齡が居住した士林官邸もこの近くにある。故宮博物院では、限られた見学時間であったため、まず陳さんの案内で主な展示物だけ駆け足で見学した。故宮博物院の 2 大名宝と言われる清代作の肉形石と翠玉白菜については、前者の小ささに意表を突かれ、後者は台中で開催中のフローラ世界博覧会に貸出中で見る事が出来なかった。その後は、各人が好みの展示を見て回る時間を作ったが、筆者は中国書道史発展過程を伝える特別展を見学。中国歴代書家の字を堪能。20 年以上前に人文研総合研究旅行で訪れた西安の碑林博物館にあった顔真卿や王羲之の古碑を思い出す。あの時は、世界史の教科書でも紹介される「大秦景教流行中國碑」の拓本を購入した。ここ故宮博物院では多くの器物や書画が名宝として注目を集めるが、陳さんによれば、台湾にもたらされたかな

²⁷⁾ 篠原宏『海軍創設史 イギリス軍事顧問団の影』リプロポート 1986 年、381 頁。

²⁸⁾ 檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾』10 頁。

りの文物が清代の書類であった。いわゆる図書文献に分類されるものである。故宮博物院見学を終え、昼食は日本各地に店舗を展開する鼎泰豊（ディンタイフォン）で取る。台北の MRT 東門駅近くの店は混雑が半端でないと聞いていたが、噂にたがわず店前の通りにまで溢れる入店待ちの人込みであった。昼食後桃園国際空港に向かい、お世話になった陳さんに感謝の意を表して、15 時 20 分発のエバー航空便で帰国の途に就いた。